令和3年 - No.89

7 寺子屋だより

※題字／森川芳聲

柳川市川下りの堀端

歌碑のこころ

待ちぼうけ　北原白秋 作詞　山田耕筰 作曲

待ちぼうけ　待ちぼうけ　ある日せっせと　野良(のら)かせぎ
そこへ兎が　飛んで出て　ころりころげた　木のねっこ

※詳しい解説は12頁に掲載しています

もくじ

2 巻頭言「志明館」開校への正念場……山口　秀範
3 「社中」だより……坂本　和代
4 「偉人レポート」……鷹取　綱一
6 天地いっぱい②……森川　徹
7 〝唱歌〟〝童謡〟
　―先人からの贈りもの②……寶邊矢太郎
8 あれこれ思うこと⑥……古川　忠
連載再開
9 伊達政宗「馬上少年過ぐ」をめぐって⑥…廣木　寧
10 TERAKOYAふぉとれぽーと
11 〝あちこちde寺子屋〟のご案内
12 歌碑のこころ(18)　編集余録　余録の余録

巻頭言

「志明館」開校への正念場

代表世話役　山口　秀範

小学校作りに賭けて

年来の宿望、小中一貫校「志明館」の開校に向けて、準備の佳境を迎えています。博多学園の八尋太郎理事長と意気投合し、日本一の小学校を作るための勉強会を立ち上げてから十三年の歳月が流れました。その間候補地は宗像、福津、志賀島と浮上し、いずれも諸事情により頓挫しました。そして今は北九州市小倉北区の小学校跡地利活用事業の公募に応じて、六月末に提案書提出、七月には市に設置される検討会のヒアリングを受け、八月中旬に事業者決定の運びとなります。

教育再生の一端を担うべく会社勤めを辞して今年で丁度二十五年経過しますので、その半分以上を学校開設の夢に賭けて来たことになります。この間、開校理念・教育方針の検討に始まり、各分野の専門家から助言も得つつカリキュラム策定・独自科目の構想などを固め、今まで何処にもない魅力満載の新設校誕生へ向けて機は熟しており、今回の入札にはまさに背水の陣で臨むことになります。

提案書の取りまとめに連日忙殺される中で、改めて「志明館」開設の意義に思いを巡らせ以下にその一端を記します。

先ずは徳育を

平成六年、長い海外勤務から帰国して先ず、小中学生たちの冴えない顔つき、輝きを失った瞳に出会ったことが、寺子屋事業の原点であることは度々申し上げています。自分の存在に自信を持てず、生きるお手本と出会う機会のない子供たちに偉人伝を届けようと活動するうちに、現代日本の教育の問題点が次々と浮かび上がって来たのです。

各種国際比較は日本の子供たちの置かれた異常な環境を際立たせます。自尊感情（生まれて来て良かったと肯定する気持ち）が希薄で、自然体験が乏しい（日の出を見たことがない、裸足での泥んこ遊びと無縁）そして父親から躾けられた思い出がない、などの割合が突出していたのです。

昔から言い慣わされるように「つ」のつく年齢（「一つ」から「九つ」）のうちに、知徳体の土台を築くこと、とりわけ「徳」の芽をしっかりと伸ばすことが肝要です。独自科目の一つ「寺子屋」の教科書三部作（「偉人伝」・「素読暗誦」・「伝統文化礼儀作法」）を存分に活用しますが、これを先行して発刊したのは、公立の道徳教育に危惧を抱くが故です。

発憤教育とは

知徳体と並行して感性・国際性・科学的創造性の涵養は、未来を生きる児童生徒にぜひ身につけさせたい要素です。様々な〝本物〟に触れ体験の幅を広げる機会を用意します。ＩＣＴの最新技術も活用しますが、あくまで尊重すべきは「自らの興味関心に基き、自ら課題を見つけて深化させ、先達の示唆を手がかりに花開かせる学習」です。

『論語（述志編）』の「憤せずんば啓せず、悱せずんば発せず。一隅を挙ぐるに、三隅を以て反せずんば、則ち復びせざる也」に因んで、この特徴的な学びを〝発憤教育〟と名づけています。

他にも斬新な宿泊教育を研究中です。海外や遠隔地から入学する児童のため開校時に寮を設置しますが、その寮生と、自宅からリモートでつながる子供たちが毎日定時にラジオ体操や読書タイム参加を共有出来ます。学年に応じて「体験入寮」の機会を増やし、やがては全寮制に移行したいと考えています。この構想には、特に母親の「子離れ」促進の狙いもあるのです。

国家緊急の課題

世情は疫病感染防止一色となって既に一年半を経過していますが、我が国周辺の国際情勢は日に日に危機を深めています。パンデミック発生以降各国は国境を閉じ、グローバル化の限界は明らかになりつつあります。異形の隣国による世界征服の野望に対しては、民主主義諸国の協調連帯が不可欠ですが、その前に我が国自身の独立自尊意思が何より求められます。

①国家緊急事態へ平時からの備え、②国防を担う自衛隊を正統に位置づけること、そして③将来に向けて「国柄」を闡明すること。少なくともこの三つは一刻も早く内外に明らかにすべき必須事項でしょう。いずれも最高法規「憲法」と「皇室典範」に手を入れて、占領政策の残滓を払拭する大事業ですが、未来を託する子供たちのために積み残しは許されません。

百年後の世界のために

五十年先、百年先の日本と世界の姿を夢想することがあります。環境やエネルギー危機を克服し、最先端の科学技術を駆使しつつ人々は共存し豊かさを実感出来ているでしょうか。あるいは、貧困と格差が増大して争いの絶えない地球かもしれません。

どちらに転ぶとしても、日本は日本であり続け、願わくは我が国が、明るい世界の実現を牽引するリーダー役を務めていることを。

この願いが叶うか否かは、これからの人作りに係っています。「世のため人のため」という利他的志を立て、「日本のこころ」を湛えつつ世界を動かす人財の卵を輩出する、そんな志明館の誕生までもう一歩です。